

平成 29 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校像】

「豊かな人間性を育み、社会に貢献できる青年を育成する」という建学の精神のもとに 21 世紀を生きる子どもたちに求められる「答えのない質問にも答えようとする意欲と力」「価値観の違う人たちと合意形成を英語で図っていく力」を育成する教育(21 世紀型教育)を推進する。その根底として我が国の教育を支えてきた「座力の育成」を教育の「不易」なものと捉え、「流行」に流されることなく「座学」を確立し時代の変化に対応できる生徒を育成する。特に開校 2 年目を迎える附属中学校においては「基本的生活習慣」の育成と定着(座力の育成)が将来の高校生活の基盤を形成するものと捉えて教育活動のあらゆる機会をとらえて育成を図っていく。

※ 近年の流行となっているアクティブラーニングも座力の育成と確立なく実施すれば「ラーニングのないアクティブ」になりかねない。

【生徒像】

「気づく心」「考える力」「チャレンジ精神」を教育の 3 本柱とし、すべての教育活動を通して、次のような生徒を育成する。

○ 社会的規律を尊重し、豊かな情操を身につけた品位ある生徒 ○ お互いの人権を尊重し、学校や地域社会の中で協力・共同できる生徒

○ 自主的、自律的な学習態度で学力の向上をめざし、異文化に触れることによって、21 世紀を担う若者にふさわしい国際的な視野を持った生徒

※ 真の国際人は自国の文化に深い知識を持ち、外国の人にもそれを紹介し深いコネクションを築ける人材という視点を失わず教育活動を推進する。

2 中期的目標

高校・附属中学共に各部・各学年で「基本的生活習慣の確立」と附属中生にとっては学芸高校の上位コース進学、高校生にとっては保護者の願いである「4 年生大学進学実績の向上」(高校保護者アンケート結果…第一位 4 年制私立文系、第二位 4 年制私立大学理系)という重点目標達成を目指して「部門活動計画」(部門目標シート)を作成し、成果目標の数値化を行い、その目標を達成するための具体的な行動計画を立てる。4 月に目標設定、11 月に進捗状況の報告、3 月に目標達成の結果と次年度への課題を校務会議、職員会議で発表し共通認識を図り次年度の課題を明確化していく。

※ 外部評価機関の「授業評価、クラス経営評価、保護者からの評価アンケート」を実施・分析し数値を示して改善を図っていく。この数値は「プラス評価」－「マイナス評価」であらわされる「指数」となっている。例えば、60 指数は 80%のプラス評価－20%のマイナス評価のことを指す。したがって「60 指数以上」A、「59～20 指数以上」B、「19～－20 指数以下」C、「－20 以下」D と考えて評価・分析する。指数と書いていない数値については%の割合表記。

※ 校務分掌については高校と附属中学校は同一の組織として運営していく。

1 生徒指導を根幹に据えた学習指導と生徒のニーズに応えられる進路指導を推進する。

(1) 基本的生活習慣の確立

学力向上の基盤は「基本的生活習慣(座力)の確立」なくしてあり得ないという教育信念から昨年度に引き続き「気づく心の育成」「チャレンジ精神」「思考力の育成」に努め、自己管理能力(自制心)を高める。また、生徒を指導する教職員の資質を向上するために機会あるごとに新聞報道や判例を示して啓発を行って行く。特に附属中学校生徒については中学 3 年間で基本的生活習慣を確立させることが高校進学後の進路実現につながることを意識して指導していく。人生を「三段跳び」に例えるならば、小学校時代は「準備体操の時期」、中学校時代は「助走の時期」、高校は最初の跳躍にあたる「ホップの時期」、大学や専門学校は二回目の跳躍にあたる「ステップの時期」、そして最後の跳躍で社会にジャンプしていくと捉え教育活動を展開していく。

ア、社会人としては許されない「遅刻」の防止に自ら努める「自己管理能力を育成」し時間を守ることの大切さを自覚させる。(自己管理)

イ、いじめを許さない学級、学年、学校「文化」を作り出し、生徒全員が安心して登校し学習できる学級・学校を目指す。(他者理解)

ウ、社会人として巣立つにふさわしい「服装・マナー」の向上に努め保護者から信頼される教育環境を作り出す。(教養育成)

エ、SNS やメールの使用上のマナーを含め、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーションが図れるように指導する。(人権育成)

特に高校 1 年、附属中学校 1・2 年は一人一台のタブレットを持たせているのでその正しい使い方を指導していく。

オ、教育裁判の事例を職員会議等で示して教職員の危機管理能力を高めるとともに「危機管理マニュアル」の作成を目指す。(危機管理)

※ 現在社会の中で子どもたちは大人が想像できない「ストレス」をため込んでいる。特に保護者の「過保護」「過干渉」は子どもに大きなストレスとともに「愛着障害」(自分は誰からも愛されていないと思う情緒障害)を引き起こしていることを認識し保護者への啓発を含めた生活指導を進めて行く。

(2) 学力向上と進路実現

学力向上の基盤は、生徒の「自己管理能力の確立なくしてあり得ない」という教育信念から昨年度に引き続き、教科学習、講習等様々な教育活動を通して時間の使い方を学ばせるため 4 年目となる「学芸手帳」(バーチャルタイプ)の利用を促進し生活習慣を見直し時間の使い方の工夫から短期・中期・長期と計画的に学習活動(クラブ活動も含む)をする習慣を定着させる。

この「自己管理能力」を高める中で保護者・生徒の願いである「4 年制大学進学」(附属中学校生徒にとっては基礎学力の確立)という目標を実現できるように進路ガイダンスを行い、希望進路の発見・実現に寄与するため教育課程を編成(選択授業での対応や多様な講習の実施)するとともに「電子黒板(70 インチの黒板上を左右に移動できる液晶型)」「iPad(一人一台)」「スタディサプリ」「英語サプリ」を利用した授業を通して自学自習を推進し授業改善にもつなげていく。附属中学校生徒については、授業での利用だけでなくタブレット端末を利用した「職業調べ」(総合的な学習)を通してキャリア教育を進め将来展望に立った学習意欲の喚起を図っていく。

また、大学入試改革に備えて特に本校が力を入れている国際理解教育の推進のために英語 4 技能の育成を図るために分掌組織に「英語教育研究会」を立ち上げ、教育大の教授を招き研修に努める。また、1 年留学制度の整備充実を図り、子どもたちのニーズに応えるとともに留学にはまだ抵抗感があるが英語をより広く深く学びたいという生徒のニーズに応えるコース等を考えて行く。

3 年目となる看護コースについては、4 年生大学よりも専門学校にと言う流れを食い止めるように生徒・保護者への啓発をさらに進めて行く。

附属中学校は「学習とクラブ活動」の両立をめざしながらも特に「英語教育」については重点を置き、中学校卒業段階で全員英検 3 級を目指す。

以上のように進路指導の基盤となる教員の授業力を高めていくため「生徒の授業アンケート」(年 2 回)と教職員間の相互授業参観等を実施し、授業内容の点検や教授法の改善の視点を知らせる。今年度も 7 月の調査で改善すべき点を示された多くの先生が 2 学期に改善を図り、7 月より高い評価を得て

いることが分かる。

- ア、昨年度に引き続き教育のデジタル化に対応し「電子黒板」「iPad」「スタディサプリ」「英語サプリ」等の利用促進を行い授業改善に努める。
- イ、グローバル化に対応した教育活動を展開するため英語教育の改善と国際理解教育の推進をさらに図っていく。開校2年目となる附属中学校では各学年にネイティブ教員(常勤)を配置し英語力に対応したクラス編成を単元によって取り入れ英語力の育成にさらに努める。また、英語力向上の基礎となる国語力の育成も図る。
- ウ、教員に対する生徒の授業アンケートを実施し「自己の授業の振り返り」を行わせ授業方法の自己点検を行うとともに授業力向上のための相互授業参観を行い「授業に対する信頼度」「学習効果への実感度」等を伸ばし生徒の満足度を高める。
- エ、自ら課題を見つけ能動的に学ぶ習慣作りの一環として漢検・英検・数検などの資格試験受験の機会を増やす。
とくに次年度入学の高校1年生が大学入試改革最初の受験者となることを意識し外部試験の導入についても検討する。
- オ、生徒の多様なニーズに応えるために教育課程の編成、多様な講習の機会を設定し進路指導を充実させる。

(3) 社会に貢献できる資質の育成

「少子高齢化社会」を生き抜いていかなければならない子どもたちにとって必要な資質は、自立・自律の精神とともに社会の中で自己を活かす精神と実力をもった大人として成長していくことにある。これからの職業選択は、自分は「何に向いているのか」ではなく「何をなさねばならないのか」と言う視点を持たさなければならない。本校がすべてのコースでクラブ活動を認めているのも教科の学習だけではなく、学校行事やクラブ活動、ボランティア活動等を通してこれらの資質向上を図れると考えているからである。

特に子どもたちの生活の基盤となる「クラス」において互いに助け合う精神の確立が大切だという認識のもとに教育活動を行っていく。

- ア、ボランティア活動(大阪マラソンへのボランティア参加等)やセレッソとのサポーターティングマッチ、エコ活動、地域清掃活動を通して社会への関心を高めるとともに奉仕の精神を育成する。
- イ、クラブ活動を活性化させ、勝利をめざし努力する過程で持続力や耐性を養い、仲間と協力しあう姿勢(協調性)を育成する。
- ウ、体育大会や文化祭等の行事を通して他者への思いやりや自分の意見を分かるように相手に伝える力(コミュニケーション能力)、調整力を育成する。
- エ、日々の授業に対する姿勢こそが「集中力を養う最適の手段」であり、学習とクラブ活動・奉仕活動・学校行事への取組等を両立する中でこそ「生活体験に基づいた生きた知識(智慧)を育成できる」という観点で教育活動を進める。

2 保護者に信頼される学校づくり

(1) 保護者への情報提供

「校区という地域」を持たない私立高校・附属中学は、保護者との連携をいかに図っていくかが大きな課題といえる。子どもが勉強や各種行事で活動する姿が見えるように情報発信の質を高めていくことが大切だと考える。その基盤となるのは子どもたちが担任をはじめ教職員を信頼し、学校生活を充実して過ごしている姿を家に帰ってきた子どもから保護者が感じることができるようにならなければならない。また、「進学校」として進路指導を充実していくことも欠かせない。成績懇談や保護者集会を充実し、生徒や保護者が知りたい情報発信となるように情報の質を高めていく。

このために年2回、保護者対象のアンケートを行い、本校の教育活動の振り返りと改善点を明確にして次年度の課題の明確化を図る。

- ア、保護者の学校への信頼度(生徒・保護者へのきめ細かな対応と学校生活の充実)を高めていく。
- イ、学校からの情報発信力を高め、ホームページの閲覧者数を向上させ、開かれた学校づくりを通して保護者との信頼関係を深める。
- ウ、成績懇談や進路ガイダンスを充実し保護者・生徒に質の高い豊富な情報を発信し幅広い選択肢の中から進路を決めていくことのできる環境づくりに努める。

(2) 危機管理体制の確立

異常気象の表れと思われる局地的豪雨・巨大台風の上陸をはじめ、いつ来るかも知れない地震への対応を考え、生徒の安全を第一にした防災体制を地域社会とも連携し構築していくことが求められている。特に大和川の水位上昇で帰宅困難となった場合の対応を関係機関と連携し構築していく。

- ア、避難訓練(火災時の避難経路と地震時の避難経路の区別)を通して集団で避難するときの心得を育成し、災害に備える。
 - イ、学校として帰宅難民となる生徒が出た時を想定した避難物資等の準備体制や保護者との連絡体制を整える。
- また、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命と認識し、事故防止にも努める。万一の災害・事故に備えた保険についての知識を高め教職員賠償保険や第三者賠償保険等にも加入して教職員・生徒の保障に努める。

【自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

〈自己診断の結果と分析〉

1 基本的な生活習慣の確立

保護者アンケート「生活指導は充実していて規範意識と自律性の育成に十分な効果をあげているか」という質問は附属中学校では77%の高い支持を受けている。高校でも72%の肯定回答となっている。この数字と比例して「この学校に入学させて良かった」という肯定回答が附属中で77%、高校でも74%の指示となって現れている。保護者が本校の教育に期待している項目に「自主自律の姿勢の育成」(学力向上について附属で第2位、高校で第2位)が入っているのと一致している。また、「本校の特色は何か」という質問で「子どもたちがいきいきと学習や部活に取り組んでいる」「クラブ活動と学習の両立」への評価が高い。

高校・附属ともに第1位、第2位となっていることから保護者の大半が子どもの学力向上・進路保障だけでなく本校の教育目標の「社会に貢献できる青年の育成」に賛同していることが分かる。

この目標達成のために「遅刻」「服装」等のルールの遵守を指導目標としてきたが、目標数値には達していなかった。今後も遅刻指導については、高校生ともなれば自分で時間管理が出来なければならず、親に頼ってはい

【学校協議会からの意見】

1 基本的な生活習慣の確立

- 将来社会に出た時に最も大切な資質は「自己管理能力」。仕事の優先順位を考えチームとして働く職場の人に迷惑を掛けないこと。高校時代には是非とも身に付けておいてほしい資質です。学芸手帳の使用を通してこの資質を向上させてほしい。
- 「遅刻は時間どろぼう」という言葉があるように周りの人たちへの迷惑行為と言う認識が今の子どもたちや親に足りないのではないかと。
- 保護者の仕事は「勉強しなさい」と口うるさく言うことではなく、食事・睡眠の大切さを教える事。環境づくりこそが大切。
人生経験が今の若いお母さんがたよりある私から意見を述べさせていたたくと「食事」の在り方こそ子育ての基本と思う。共働きと塾通いで日本の家庭から「一家団欒」という言葉が死語のようになってきているのではないのでしょうか。また、昔言われた「まごわやさしい」という食事内容を今の保護者の方はご存じなのかとも思う。
- 先生がいないときは、ルールを守ろうとしない生徒が増えているのは残念。規則は強制されるものではなく自ら守るべきもの。

だめだということを機会あるごとに該当生徒やクラス指導で訴え、「遅刻は他人の時間を奪う行為」という意識の定着を図っていく。

また、附属中学校の生徒には「遅刻をしない」ではなく、「遅刻をしないためには何時に最寄りの駅に着いたら良いのか」「何時に家を出たら良いのか」というように具体的な生活計画を立てさせる。

いじめ行為は、保護者アンケート「いじめがなく安心して登校できる」との回答が附属中では79%、高校87%と高い数値となっている。油断することなく早期発見を目指して5月と11月にアンケート調査・教育相談を行い、クラブにおいても練習終了後、着替えた後のミーティングで生徒の様子を観察するように教職員を指導していく。さらに、生活指導の事例を職員朝礼時に話し、日々注意喚起を教職員にすることで教員の生活指導力の向上にも努めてきた。

特に今の子どもたちは大人が想像する以上のストレスをためており、小さないじめが引き金となって自死するに至ることを考え子どもの言動に注意を払うように啓発していく。

一方、学校現場を悩ませているSNSについては、次年度よりiPadを利用した教育活動が実施されることもあり、「ソーシャル・メディア・ポリシーの確立」に向けて今年度も方針を明確にして取り組んできた。その結果、昨年度に比べSNSの書き込みによる処分者は大幅に減少した。

2 学力向上と進路実現

開校2年目となる附属中の基本方針は「学習とクラブ活動の両立」である。「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」という評価についても附属中は60指数を超えている。高校では保護者アンケート「どのような進路の実現を望んでいるか」の回答の78%が「4年制私立大学」（文系55、理系28）となっている。また「進路指導が充実している生徒の進路指導の発見・実現に十分寄与している」という回答指数が67%の肯定回答となっている。次年度は80を超える方策を進路指導部を中心に考えさせていきたい。学力向上は、日々の授業がこの鍵となる。学力向上に大きく寄与する「先生の好感度」については、改善すべき点が明確に示されていたため後半の調査では大幅にアップした。しかし、学力向上実感（この授業を受けて学力があがったと実感できるか）については、改善点が示されているにも関わらず、自己改善が出来ず、マイナス評価となっている教職員がおり、全体の評価を下げている。

ハード面では、すべての教室に電子黒板が設置され、新1年生から高校も附属中もタブレットを持つようにした。それらを使用して活用できるようにスタディ・サプリ、英語サプリを導入し、自学自習を促し学力向上を図っているが、まだ十分な使用頻度とはなっていない。

また、進路指導については、十分な力がありながら、3学期の一般入試まで待つことができず、安易に推薦入試を受けて早く進路を決めてしまうという傾向が生徒にも保護者にもあり、関関同立等の進学実績をより多く伸ばすことができなかった。次年度は、これからの大学入試改革も踏まえて進路指導部より一般受験で本当に行きたい大学に行くように指導を繰り返していく。このため、「入試情報などの進学指導に必要な情報は、生徒のみならず保護者にも十分提供されている」と言う保護者アンケートの肯定回答を65%からさらに伸ばしていく必要がある。

3 社会に貢献できる資質の育成

本校は、すべてのコースで「勉強とクラブ活動の両立」を奨励している。これはクラブ活動を通して先輩と後輩の在り方、未熟な生徒にどのように教えれば向上するのか、そのためには自分はどういう背中を後輩に見せればよいのか等を経験する中で真の奉仕の精神が生まれるものと確信しているからである。今年も昨年度に引き続き、大阪マラソンへのボランティア協力にも多くの生徒が参加した。子どもたちの心に「奉仕の精神」を醸成できたと考えている。クラブ活動についても作法室（和室）を造り、高校・附属中学校生徒のために書道・茶道・競技カルタ部を発足しスポーツに偏りがちなクラブの活性化も図ることができた。行事についてはスポーツ大会、文化祭とともに学年縦割りで行う体育大会を通して学年を超えた一体感を創っていくことができた。

○ 附属中学校の親と高校の親との意見交換の機会を持つことも必要ではないか。中学校時代をどう過ごすかを知りたい機会になると思う。

○ いじめ事象がアンケートで「少ない」ことはいいことだが、「ゼロ」ではないことを考え、その撲滅にさらに気を使ってほしい。

○ 今まで高校生だけであった校舎に小さな中学生たちが同じ校舎の中で学び、廊下を歩いていることは高校生たちにも大きな良い効果を与えていると思う。

廊下・グランド・体育館に高校生と中学生が混在していることは素晴らしいと思います。

○ SNSへの書き込みが将来の就職にも多大な影響があることを指導していることは良いと思う。便利なものだがそれに比例して「怖さ」もあることを機会あるごとに周知させてほしい。特に附属中学校の生徒には「思ったことをすぐに書き込む癖」を直しておくことの大切さを教えてあげてほしい。

○ 「挨拶」は本来は「家庭」のしつけの一環。いくら勉強ができてスポーツが上手であっても「おはようございます」と「ごめんなさい」が言えないようではだめ。これを教えるのは親の仕事。チェックするのは学校の先生の仕事。

○ 集団生活の中での人間関係の距離感を教えることができるのはもはや学校だけ。少子化と地域社会の崩壊で人と人との関係づくりも学校でしか教えられない。ここで学んでいないと社会に出て結局困るのは子どもと言う認識のもとに親も巻き込んで指導してあげてほしい。

2 学力向上と進路実現

○ 学力向上のための授業改善のツールとして「電子黒板」「タブレット」を導入しているのは理解できるが、それらはいくまでツールであり、指導する教員の人間的な魅力こそが教育の根幹にあると思う。その魅力を磨くことを忘れて（機械）に頼っていないか。最近の医者にも多い患者の顔を見ずに机の上のパソコンばかり見ている状況になっていないかも反省材料にしてほしい。

○ 学校だけでなく企業の現場でも発達障害の傾向を強く持つ若者たちが就職してきている。学校現場で大切なことは教育の「プロ」である先生がそれらの子どもにどのように接していけばよいかを周りの子どもたちに示すことだと考える。教科の指導法は出来て当たり前であり、それに加えて人間教育も出来る先生に成長してほしい。

○ 最近、感じることは「すべてを分かるように教えることが当たり前」という風潮がはびこっていることだ。これでは子どもは考えない。あえて分かりにくい教え方をしたり、すべての解説をしないで考えさせることも必要。親切すぎるのは教育ではない。勉強とは書いて字のごとく「ハード・トレーニング」だという認識が子どもにも親にも必要。

○ 昨年も言ったが、進路面での意識を高める点が弱いと思う。外部の就職コンサルタントなどの人材を呼んで生徒に関わらせるのもいいのではないか。

○ 進路を考えるということは自己を見つめさせることだと思うが今の保護者たちは子どもに近すぎると思えてならない。もっと子供に考えさせたり、試行錯誤させたりする機会を与えてあげないと自立心が育たないと思う。自立心のないところに進路獲得などあり得ない。

3 社会に貢献できる資質の育成

○ 学力とは単に教科の点数ではない。点数が良くても人をいじめたり、社会的に弱い立場の人のことに関心が持てないのでは教育の失敗と言える。この精神をもとにさらに学力をつけることが大切。智慧のある悪魔を作ってはいけない。

○ 私の娘は大阪マラソンのボランティアに参加し、ボランティア活動の素晴らしさを学んだ。学芸が行っているボランティア活動をさらに活発にしてほしい。

○ 普段の学校生活の中で「困っている人がいたら助けてやろう」「声を掛けてやろう」という姿勢を子どもたちに植え付けてほしい。

○ トイレの水道水が出っぱなしになっていたらそのことを通して水資源の大切さを教えてあげてほしい。教室の蛍光灯がスイッチ一つで明るくなるためにどれだけの人たちが関わっているかも教えてあげてほしい。多くの名もなき人たちのおかげで私たちは、恩恵を被っていることを特に附属中学生たちには指導してほしいと思う。

<p>4 保護者への情報提供</p> <p>保護者アンケート「学校のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の回答は、附属中学では 79%、高校では 70%の肯定回答が得られた。また、保護者から見て「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」の回答は、附属中では 90%、高校でも 83%の肯定回答を得ている。私学は、地域という「校区」を持たないため、学校から保護者への情報発信のあり方が保護者との信頼関係を築く上で非常に重要なものとなる。これらが「知り合いや親せきにこの学校を進めたい」という肯定回答を附属中で 77%、高校で 74%の数値となって現れている。</p> <p>また「授業参観や懇談会は適切な頻度で行われており、学校の様子をうかがい知る機会として機能している」という保護者アンケートの肯定回答が附属中では 79%、高校で 74%となっている。以上から保護者との連携はまだ課題はあるとしても順調に推移していると考えている。</p> <p>5 危機管理体制の確立</p> <p>本校は大和川以南からの通学者が多く、豪雨による氾濫・通行止めにより帰宅困難となる生徒が 3 分の 1 を超える。このため、昨年度に引き続き 4 月より各自に教室保管用の避難物資を購入し、その対応を図ることができた。この取り組みは今後も進めていきたい。</p>	<p>4 保護者への情報提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ LINE の普及で保護者も生徒も瞬時に情報の交換と共有をすることが当たり前になっている中で学校と保護者・生徒同士の情報共有は大変遅れている。「待つこと」を嫌う風潮の中で学校と保護者の軋轢の原因となっているように思える。 ○ 小学校のように学校からの情報提供が過多になりすぎるのも子離れできない保護者を作り出すことになるので高校・中学生ともなれば親はもっと子供を信じて待つ姿勢が大切。細かすぎる情報は不必要だと思う。 ○ 昨年も書いたが、高校生なのだから学校の子どもの生活についての情報はそんなに必要ではないのかと思う。むしろ、親が必要なのは進路情報だと思うのでホームページ等を利用していつでも情報を得られるように工夫してほしい。親にだけ閲覧できる ID を付与してもらおうとか。 ○ SNS やホームページも時代の流れだと思うが、直接会って話し合う機会を何とか工夫できない物かと思う。特に附属中学校の生徒の親はそう望んでいると思う。 <p>5 危機管理体制の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 2000 人を超える生徒が地震発生時にどのように避難するのか不安。 ○ 継続して各教室に災害避難物資を置いたのは良いと考える。また、それらの物資に対するいたづらがないのは子どもたちの意識の高さだと思う。 ○ 昨年も言ったが、地震で水道水が止まった場合のトイレの水の確保についても各校舎の下に雨水をためる工夫等はできないものか。井戸を掘る、雨水をためる等。
--	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 基本的な生活習慣の確立	<p>1 規律ある学校生活の確立</p> <p>(1) 規範意識と自立性の育成</p> <p>(2) 学級集団の育成</p> <p>(3) 教職員の学級経営・生徒対応能力の向上</p> <p>以上の三項目を達成する中で学習環境を整え学力向上をめざします。</p> <p>附属中学校の設立趣旨は子どもたちに「落ち着いた教育環境」を保障することにある。</p> <p>この教育目標実現のための教育活動を展開する。</p>	<p>私学の最大の教育目標は生徒の「学力保障」にある。その基盤となるのが「落ち着いた学習環境」と言える。</p> <p>クラス・学年の秩序は真面目な生徒たちによって支えられているという認識のもとに校則をきっちり守り、気づく心を持って困っている人たちに声を掛けることのできる生徒を育成する。</p> <p>(1) 遅刻防止週間・服装違反撲滅週間等を定期的の実施し、生徒の規範意識向上を図る。</p> <p>○ 指導カードの発行による啓発</p> <p>(2) 「いじめアンケート」を実施し、担任・学年主任・生活指導部・管理職による点検で共通認識を図りいじめを許さない学校づくりに専念する。</p> <p>○ いじめ対策委員会の実施</p> <p>(3) 学級の係活動や清掃活動を協力して行う雰囲気を作り真面目な生徒が損をしない、担任に不信感を抱かない学級づくりを行う。</p> <p>また、生徒の人間関係を深めクラスと言う仲間育成の場で担任のきめ細やかなリードのもとに子どもたちの良さを引き出すことのできる担任力を育成する。</p>	<p>(1) 基本的な生活習慣確立のため各学年共に「一人あたりの遅刻回数」を 1 年 2、2 年 3、3 年 5 回、附属中 1 以内とする。</p> <p>(2) 学校生活全般を通じて「この学校には、いじめは少ない」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(3) SNS への人権を侵害する書き込みについての指導を各学年 2 件以内に抑えることを目指す。</p> <p>(4) 学級経営において</p> <p>①「生徒の態度や行動が間違っているときはきちんと叱ってくれるし、感情的にならず生徒が理解できるように配慮してくれる」指数を 50 以上とする。</p> <p>②「生徒間のトラブルは少なくクラスメートを大切に作る風土がある」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(5) 「いじめの少ない学校・学級となっている」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(6) 担任は「クラス生徒全員と話す機会を持つ」という指数を 40 以上とする。</p>	<p>(1) 1 年 2.77 (昨年度 2.75)、2 年 3.86 (5.48)、3 年 5.7 (7.53)、附属中 1.1 という結果となった。昨年度よりも改善されたが目標達成には届かなかった。「遅刻は時間泥棒」という視点から保護者との連携を密にして指導を継続していく。</p> <p>(2) 1 年 39、2 年 35、3 年 55、附属中 38 と高い肯定指数となっていることから規範意識は向上してきている。</p> <p>より高い質の意識向上を図るためにボランティア活動等にも力を入れて行きたい。</p> <p>(3) 子どもの生活に入り込んでいる SNS に伴うトラブルは学年が上がるごとに減少している。附属中でも指導例があるが一部の保護者の中で指導に理解を示さない者が出た。概ね 2 件以内に抑えることができた。</p> <p>(4) ① 1 年 48、2 年 44、3 年 49、附属中 63 で高校は 60 指数には至っていない。一方、まったく叱っていないかと言うとそう感じている生徒は 1 指数で生徒の心に入る指導までは至っていないことが分かる。② 1 年 80、2 年 83、3 年 90、附属中 41 と学年が上がるごとに指数もよくなってきている。</p> <p>(5) いじめのないクラスという評価では満足度指数が 66、附属中 60 と高い数値を示している。また、良い友人に恵まれていると言う指数も 56 と言う高水準となっている。教師側の気づきと情報交換を高め小さなことを放置せず、主任を中心に学級・学年経営を進めていく。</p> <p>いじめが少ないと感じている生徒も学年が上がるにつれて指数が高くなる良い傾向が見られる。</p> <p>(6) 1 年 41、2 年 40、3 年 45、附属中 45 と高い数値を示している。</p>

			<p>(7)担任は「ホームルーム活動が充実して行えるように工夫してくれる」という指数を50以上とする。</p> <p>(8)「クラス全体で取り組む活動を通して一体感が持てるようにしどろしどろ」という指数を45以上とする。</p>	<p>(7)1年25、2年25、3年34、附属中46と高い数値を示している。</p> <p>(8)1年32、2年35、3年54、附属中46と高い数値を示している。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">2 学力向上と進路実現</p>	<p>2 学力向上と進路実現に向けた取り組み</p> <p>(1)生徒による授業満足度の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業アンケート・相互授業参観 ○ 教育のデジタル化 電子黒板とタブレット利用の促進 ○ 英語教育の改善 <p>(2)自学自習の態度を養成し意欲的に学習する姿勢を身に着ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スタディサプリ・管理自習室の利用促進 ○ 英検・漢検等資格試験受験の促進 <p>(3)希望進路の発見と実現に寄与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際理解教育の促進 ○ 多様な講習の充実 	<p>附属中の設立趣旨は高校進学後につまずかない基礎学力の定着であり、高校は「4年制私立大学への進学」を望む保護者の願いに応えることと言える。このため教師の授業力向上は本校教育の根幹をなすと認識している。</p> <p>また、成熟した民主主義社会は「選択と自己責任」の社会と言える以上複雑化する大学入試の情報提供は欠かすことができない。</p> <p>授業力評価のアンケートを分析すると授業を受けて「学力向上実感」があると評価された先生は「好感度」においても高い数値をあげている。この保護者の信託に応えるために次のような取組をおこなう。</p> <p>(1) 授業力の向上をめざし、7月実施の1回目の授業評価で「何が評価を下げる原因となっているのか」「どの点を改善すればよいのか」を自己研鑽させる。また、相互授業参観(6月、11月)、ベテラン教師による若年教師の指導を充実させる。特に新任講師に対しては、授業参観・レポートを作成させ教科での指導を充実させる。</p> <p>また、主任を中心に担任・教科担任がクラスの授業の状態を把握し、問題がある場合はすぐに改善策を打つ体制を整備する。</p> <p>(2)デジタル教科書が急速に普及してくることに伴って全館整備が終了した電子黒板に加え、iPadを利用し授業改善に取り組む。</p> <p>(3)英語改革に対応し英語教育研究会を立ち上げ本校の英語教育について見直し改善を図る。</p> <p>(4)スタディサプリを導入し生徒の学習環境を整え自学自習を推進する。</p> <p>(5)英検・漢検等の資格取得者を増やしていく。</p> <p>(6)生徒のニーズの高い1年留学制度をさらに整備・充実する。</p>	<p>(1)相互授業参観を実施する。</p> <p>授業アンケートを実施し次の項目のプラス指数を向上させる。</p> <p>(2)教員の「好感度指数」を60以上とする。</p> <p>(3)「先生の授業を受けることにより学力や知識の向上を実感できる」という学力向上実感指数を60以上とする。</p> <p>(4)クラスにおいて「授業時間は集中して授業を受ける生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(5)高校では「さまざまな進路希望に対応できるように教育課程は適切に整備されている」、附属中では「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果をあげている」という保護者アンケートの肯定的意見を60以上とする。</p> <p>(6)「入試や進学に必要な情報が十分に提供されている」という指数を40以上とする。</p> <p>(7)「進学講習が学力の伸長につながった」という指数を60以上とする。</p> <p>(7)「全科目にわたり学習指導は充実しており学力向上に十分な成果をあげている」という指数を60以上とする。</p> <p>(8)電子黒板を利用した公開授業、タブレットを使用した授業研究を年2回実施する。</p> <p>(9)英検準2級以上の資格保持者25%以上とする。</p> <p>(10)スタディサプリの初期設定ログイン95%を目指す。</p> <p>(12)管理自習室の月利用者数を500、サテネット室</p>	<p>(1)教育は指導者の力によるところが大きい。このため、指導力のある教員が新任教員を指導する体制の確立が急がれる。「授業参観レポート」を作成し相互授業参観を昨年度に続き実施したが、普段の授業で互いにコミュニケーションをとって点検しあい高め合うまでには至っていない。また、教科会で指導案等の点検・意見交換等もはかられていない。</p> <p>(2)教員の生徒からの好感度と学力は比例するものである。平均好感度は全国水準の66指数に対して本校は62指数となっている。附属中は全国が61なのに対して68指数と高い水準を保っている。</p> <p>(3)学力向上実感は45指数(昨年度41)となっている。落ち込みのある教員が平均を下げている。指数的には問題はありませんがさらなる向上を図るために自己研鑽に努める姿勢が望まれる。</p> <p>(4)指数としては1年31、2年41、3年35、附属中26となっており、附属中の指数が低い。附属中所属の先生による改善のための論議が必要。</p> <p>(5)高校の保護者の77%は肯定している。附属中の保護者は56%にとどまり、28%の否定的な回答が見られた。</p> <p>(6)肯定的意見に回答してくれた保護者は58指数となっている。</p> <p>(6)保護者からのアンケート分析では肯定意見が67となっている。</p> <p>(7)講習については、次年度の学年につなげていく意味から来年度は3学期3月に設定(今までは7月)し次年度の学習につなげていきたい。生徒からは-8と言う厳しい結果が出ている。講習の在り方を改革するために「駿台サテネット21」の導入も考える。</p> <p>(7)保護者アンケートを分析すると61指数となっている。附属中は70となっている。</p> <p>(8)電子黒板とタブレットを融合させた活用には担当の先生により温度差があり、今後の課題となっている。しかし、今年度佐賀大学でタブレットを利用した入試が導入されていることを考えると対応を急ぐ必要がある。</p> <p>(9)英検準2級以上の合格者は69と中々目的達成まで道のりはある。しかし、実力があっても受験をしない生徒が多く、その原因はクラブ活動にあるとも考えられ両立の難しさがある。附属中では準1級合格者が出るなど順調に英検合格者が増加している。</p> <p>(11)本校の教育の柱となる「自学自習」を進めるためのスタディサプリのログイン数は98.15%となっており当初の目標は達成されている。</p> <p>(12)管理自習室の利用が定期テスト前を除き低調</p>

			<p>利用者数を月 350 以上とする。</p> <p>(13)英語教育改善の方策を打ち出す。 また、1年留学制度の整備充実を図る。</p> <p>(14)国際理解教育を充実する附属中の英語力を向上させる。</p>	<p>となっている。次年度に向けてより利用しやすいように部屋の拡大を図りたい。</p> <p>(13)現在、高校では、大阪教育大学の教授を今年度も招き研修会を行っている途上にある。1年留学についてはカナダとともにこの春からニュージーランド留学を現地学校と直接交渉して進めている。さらに、次年度に向けて国際教育をより充実するために「普通科」と「国際科」の二つを設置することも検討に入っている。</p> <p>(13)附属中学校では二人のネイティブを中心に「英語4技能」の充実が進んでる。 準1級合格者3、2級合格者13、準2級22名となっている。</p>
	<p>3 社会性の育成</p> <p>(1)助け合う雰囲気あふれるクラスづくり</p> <p>(2)部活動の活性化</p> <p>(3)ボランティア活動の充実</p> <p>(4)学校行事の充実</p>	<p>学校教育の目的は、教科指導による学力の向上とともに多様な体験活動を通して集団の中で協調性や耐性、社会性を育てることも大切な使命である。本校が「両立」を合言葉にすべてのコースで部活動を可能としている理由もここにある。</p> <p>(1)クラス経営力を向上させるため学年会での相互点検・改善を進める。</p> <p>(2)クラブ活動の成績と普段の学校生活は密接に関係することを指導しクラブと学習の両立を図る。</p> <p>(3)ボランティア活動の充実 地域清掃が集う、大阪マラソンボランティア活動への参加、セッション大阪とのサポーターティングマッチへの参加を進める。</p> <p>(4)生徒の自主性を育てる学校行事を促進する。</p>	<p>(1)①「クラス全体の結束力が強く行事の中で達成感や一体感があると感じることが多い」②「困っているクラスメートがいれば誰に対しても手助けをする生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(2)「クラブ活動についても明確な目標があり、その実現に向けて前向きに取り組むことができている」という数値を60以上とする。</p> <p>(3)「学校はいろんなことを体験させてくれる」「体育大会や文化祭も楽しい」という指数を60以上とする。</p>	<p>①1年35、2年30、3年43、附属中28指数という結果が出た。指数としては悪くはないがまだまだ向上する余地は残されている。学年が上がるごとに高い指数となっていることが分かる。</p> <p>②1年41、2年35、3年36指数、附属中42となっている。昨年に続き3年の落ち込みが分かった。いずれもB評価止まりになっている点を考えると生徒たちへの心の教育の必要性を感じる。しかし、個々の生徒は親切心があるが、集団となるとなかなか手助けしにくいという面もあるのでこれをもって道徳心がないとは言えない。</p> <p>(2)1年38(57)、2年36(56)、3年64(64)と言うように1・2年は昨年度より落ち込みが多い。</p> <p>(3)生徒も保護者も60を超える指数を出している。年々、子どもたちの質は良くなり、何事にも熱心に取り組む生徒が着実に増えてきている。ただ、生徒数に比較して学校施設が手狭なために十分な活動ができない面も否めない。大きな施設の必要でないクラブ活動を工夫して増やすことも考える必要がある。</p>
<p>3 信頼される学校づくり</p>	<p>3 保護者との信頼関係の醸成</p> <p>(1)保護者と信頼関係の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ホームページの充実 ○ 学芸新聞の発行 ○ 進路だよりの発行 <p>(2)進路情報の発信</p> <p>(3)防災教育への取り組み</p>	<p>附属中学校の保護者は地元の公立中学校に通学させないで遠い私学に子どもを通わせていることを考えると保護者との連携は高校以上に密にしなければならない。家庭訪問に変わる「保護者集会」「学級懇談会」「授業参観」等を計画的に実施し、「わが子の様子が見える」学校にする。</p> <p>高校も公立小中学校のように地域を校区として持たないために保護者への情報発信(学校生活充実度と進路情報の発信度)が信頼関係を築いていく上で大切な要素となっている。また、防災訓練等の安全生活に対する取組も緊急の課題であるという認識している。</p> <p>(1)担任のきめ細かな対応 体罰・暴言のないクラス・クラブ経営と教科指導を確立するための職員会議等を通じた啓発活動を進める。</p>	<p>(1)授業参観や懇談会は適切な頻度で行われていて学校の様子をうかがい知る機械として機能している」という保護者アンケートの肯定意見を60以上とする。</p> <p>(2)「入学前と入学後の学校のイメージは子どもに聞くと良くなった。この学校に入学させて良かった」という数値を40以上とする。</p> <p>(3)「知人や将来は子どもに本校を紹介してもよい」という数値を50以上とする。</p> <p>(4)担任は「生徒に対する言葉遣いや態度は丁寧で適切であると感じることが多いし、保護者からも誠実に対応してくれる」という肯定回答を80%以上とする。</p>	<p>(1)高校では74%、附属中では69%の肯定意見があった。しかし、高校で18、附属中で17の否定的意見もあった。今後の改善点として取組を進めたい。</p> <p>(2)全体では附属中で77%、高校で74%の保護者が肯定回答をしている。「入学前よりもイメージが良くなった」という指数が1年63、2年44、3年50、附属中24となっている。指数であるためB評価となっている。</p> <p>(3)全体の80%近い保護者が肯定的な回答を出してくれた。生徒たちのアンケートでも1年74、2年60、3年67、附属中73となっている。ただ、附属中については昨年度78の数値が今年は56となっていることが改善の余地のあることを示している。</p> <p>(4)全体では高校で84、附属中では90%の保護者から肯定的回答があった。 しかし高校で8%、附属中で9%の否定回答もあった。特に電話対応のきめ細かさが大切であり、家庭訪問のない私立学校では4月当初、懇談までに各家庭に担任から挨拶の電話を入れるように取組をさらに進めたい。</p>

	<p>(2)ホームページの充実 ニュース、トピックスにて更新内容を周知する。</p> <p>(3)授業参観や進路・生活指導についての保護者集会を充実 教員と保護者の距離感を縮め話しやすい環境づくりを行う。</p> <p>(5) 学芸新聞の発行</p> <p>(4) 防災教育の充実 ○避難訓練(火災時と地震時に分けて)の実施と防災備品の整備を行う。 また、附属中学生は電車等で通学している生徒も多く、災害発生時に帰宅困難となることも想定し防災グッズを常備する。</p>	<p>る。</p> <p>(5)「学校は一人ひとりの生徒を大切にしてくれる」という数値を 45 以上とする。</p> <p>(6)学校からの情報発信源となるホームページの閲覧数を 22,000/月以上、直帰率を 17%以下とする。</p> <p>(7)進路部長からの保護者対象の進路講話の充実。</p> <p>(8)大和川決壊や地震等災害による帰宅困難者対応を引き続き行う。</p>	<p>(5)全体として 44 指数となった。附属中は 52 と高い評価となっている。本校の特色は丁寧できめ細やかな対応にあると考えている。今後もこの方針を曲げないように教職員に啓発を続けて行くことが大切。</p> <p>(6)学校のホームページが充実していると考えている保護者は高校では 70、附属中では 79 と高い評価となっている。ホームページの閲覧者数の月平均が 30,133 回となり目標を大きく上回った。情報提供については 68%の保護者から肯定回答をいただいたが、5%の保護者(72/名)からは否定回答となった。</p> <p>(7)進路部長による講話や進路だよりを通して保護者への啓発が十分にできた。また、予備校等の関係者からの大学入試の現状についての説明会も定着してきている。</p> <p>(8)昨年度に続き災害避難物資もすべての生徒に配布し教室保管することができている。教室に配置された備蓄物資にいたずらをする生徒もなく卒業まで保管されている。この物資を使わなくても良い日々が続くことを祈りつつ。</p>
<p>特記事項</p>	<p>1 1年生全員にタブレットを持たせることにより授業改善を図ってきた。</p> <p>2 1年留学先の創設。カナダのオタワ以外にニュージーランド・ネルソンのワイミヤ高校への留学制度を創った。</p> <p>3 学校危機管理マニュアルを作成して生徒の安全生活に対する教職員の意識の向上を図った。</p>		